

【千の風になって】

私のお墓の前で 泣かないでください。そこに私はいません
眠ってなんかいません 千の風になって 千の風になって
あの大きな空を 吹きわたっています。

秋川雅史が朗々とうたう歌は、多くの人に、感動を与えています。独り息子を交通事故で亡くした北海道・岩見沢の父と母が、雪の積る春のお彼岸の墓地で、よさこいソーランの旗手として活躍した息子愛用の旗を、風にはためかせて仰いでいる TV の画面が心に焼き付いて離れません。

かけがえのない者が、ある日身边から居なくなってしまう。消滅したのであれば、余りにも悲しくて耐えられません。でも千の風になって、身近に生き続けてくれる。そしてこの肌で感じる事が出来る。これは大きな慰めです。聖書では霊を風という言葉で表しますから、通じるものがあります。でも人は死んだら、風になって愛する人の周りを吹きまわっているだけなのではないでしょうか。私たちは死んだらどうなるのでしょうか？

1) 何かに生まれかわって、この世で生き続けるという形で、生と死を繰り返していくという輪廻転生説。同じ人間に生まれかわるはずがありませんから、名前が違う他の人間になるのでしょうか。としますとこの私も誰かの生まれかわりということになります。遠藤周作「深い河」にも、死んだ奥さんの生まれかわりを訊ねて、ガンジス川のほとりを旅する人が登場します。



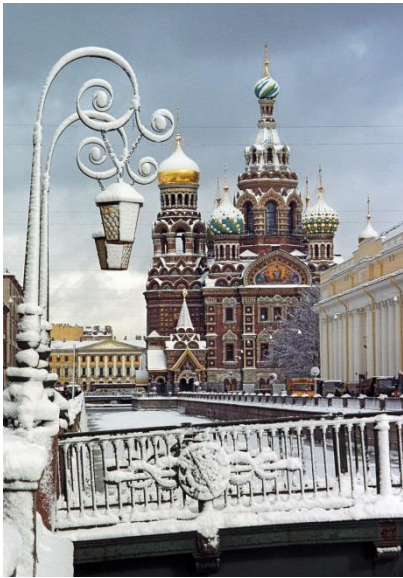
2) 十万億土の極楽目指して、冥土の旅に出かけるという説。

旅装束にお金や杖を持たせて火葬します。シンガポールでは ダンボールで作った自動車や船の中に、紙で作った紙幣をぎっしり詰め込んで、故人の着ていた洋服を飾り、鐘、太鼓で供養する式を、団地の集会所でもよく見かけました。

3) 霊魂が肉体の束縛から解放されて、永遠に存在し続けるという霊魂不滅説。千の風になるもこの説の流れでしょう。

4) 一切は全く消滅して無に帰す。渡辺淳一は札幌医大講師の医者でした。30年前の彼のエッセイにこうあります。「死の先には何もありません。死んだら肉体は腐敗を始め、最後には精神もろとも見事なほどにさっぱりと消滅してしまうのだ」さて老境の彼は今、どう考えているのでしょうか。

5) 聖書は復活を信じます。キリストご自身も十字架で死に、墓に葬られた後三日目に復活して、失望落胆する弟子たちに現れ、40日間共にいて彼らの信仰を確立させてから、天に戻っていかれました。



イエス・キリストは悲嘆にくれる12歳の少女の家族に、「なぜ泣き騒ぐのか。子供は死んだのではない。眠っているのだ」とおっしゃり、甦らせておられます。キリストにあっては死は滅びでも、朽ち果てることでも、全ての終わりでもないという信仰です。

キリストはこうおっしゃいました。「復活する時には、天使のようになるのだ」神さまは私たちを天使のような素晴らしい姿を持つ者に変えて、復活させてくださるのです。そうです。もしも今の体と同じ体に生き返るとするならば、病気に苦しみ続けた人は、同じ苦しい生涯を繰り返すこととなります。頭が悪い、力が弱いという悲しみを再び繰り返すというのであれば、復活は喜ばしいものではなくなります。

パウロという弟子はこう言いました。「キリストは私たちの卑しい体を、ご自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです」彼はてんかんの持病の他に、目も非常に悪く、医者につき添われて世界各地に伝道しました。だから卑しい体と言っています。その卑しい体をキリストの栄光ある体と同じ形に変えて下さるのが復活なのです。

復活されたキリストは、ご自分の手や脇腹を弟子たちにお見せになりました。そこには十字架の傷跡がありました。十字架こそがイエス・キリストを表す印だったからです。私も天国で「あんたは誰だい」などと言われず、すぐに「やあ、加藤享」と声をかけてもらえる私の特徴を持ちながら、しかも栄光に輝く体で復活させていただけるのです。

私たちは、何と多くの人を悲しめたり、苦しめたり、傷つけて生きていること
でしょうか。思い返せば、申し訳なかったなあとの悔いが次々と浮かんでしま
す。でも神さまはその一切を赦し、汚れを清めて、ご自分の許に皆を迎え入れ
てくださいます。お互いに労わり合い、分ち合って仲良く暮す天国を目指して、
「一足お先に」と明るく別れを告げたいものですね。葬式はご愁傷さまではな
いのです。

死は勝利にのみ込まれた。死よ、お前の勝利はどこにあるのか (聖書)